

国立公園協会の国立公園絵画制作と 画家小杉放菴について

油井 正昭

江戸川大学国立公園研究所客員教授
千葉大学名誉教授／桐蔭横浜大学医用工学部客員教授

1. はじめに

日本の国立公園は、1934年(昭和9年)3月16日に瀬戸内海、雲仙、霧島の3国立公園が最初の国立公園として同時に指定されて以来、2016年(平成28年)まで82年の歴史を刻んでいる。この82年の間に、国立公園は全国に指定が進み、2016年12月現在の公園数は33公園、公園総面積は約215万ha、国土面積の約5.7%を占めている。

国立公園の創設運動は、1911年(明治44年)第27回帝国議会(衆議院)で、静岡県選出の清峯太郎衆議院議員による「國設大公園設置ニ関スル建議」と、同じ議会で西山愼平日光町長が提出した「日光山ヲ大日本帝國公園ト為スノ請願」が始まりとされる。この2件は衆議院本会議で採択されたが、政府の具体的な動きはなかった。

政府が具体的に動き出したのは1921年(大正10年)で、この年内務省が全国に16カ所の国立公園候補地を選定して調査を始め、全国的に国立公園創設の機運が高まることになった。

大正時代から昭和にかけては、国立公園に関心のある学識者による国立公園の研究や啓発活動が盛んになり、国立公園の意義や指定の必要性が指摘された。こうした状況の中で、国立公園創設を推進することを考えた学識者、内務省関係者、民間事業者が1927年(昭和2年)12月に発起人会を開いて「国立公園協会」を設立した。

「国立公園協会」は、国立公園制度づくりや啓発活動に力を入れた。国立公園協会の活動は、国を動かす力となり、1931年(昭和6年)4月に「国立公園法」が制定された。また、啓発活動では、1929年(昭和4年)3月に機関誌「国立公園」を創刊して国立公園思想の啓発や国立公園の意義の普及に努め、国立公園候補地の紹介活動も活発に行った。その啓発活動の一つとして、1931年度(昭和6年度)の事業計画で国立公園候補地を絵画に描いて紹介する展覧会を計画した。

この1931年に始められた国立公園の絵画制作事業

は、2012年(平成24年)3月末に財団法人国立公園協会(1949年に財団法人国立公園協会になった)が解散するまで80年以上に亘って継続された。この間に制作された国立公園の風景絵画(以下：国立公園絵画)は約100作品にもなった。国立公園絵画は、当時の一流画家に揮毫を依頼して制作されており、作品レベルの高い国立公園絵画コレクションになっている。

現在ある国立公園絵画は80作品なので、描かれた作品すべては残っていない。その理由は、最初に描いた展覧会の作品は画家個人の所有だったため、展覧会で売約になった作品があること、展覧会後は画家へ返却され、その後保存計画が発案されて集めたとき、画家の手元にそのまま残された作品があること、戦前保管していた厚生省庁舎が落雷延焼被害を受け3作品が焼失したこと、太平洋戦争中に戦災被害で焼失した作品があることなどによる。

現存の80作品は、2012年(平成24年)に財団法人国立公園協会(以下：国立公園協会)から、日光国立公園内にある「日光市立小杉放菴記念日光美術館」(以下：小杉放菴記念日光美術館)に寄贈され、現在は小杉放菴記念日光美術館に保管されている。

小杉放菴記念日光美術館は、日光市出身で名誉市民の画家小杉放菴の業績を顕彰して開設された美術館であり、国立公園協会が絵画制作の文化事業をスタートさせた当初から小杉放菴画伯は関わっていた。

国立公園絵画の制作は、国立公園協会が後世に残した大きな文化事業だったと評価してよいと思う。こうした背景を踏まえ、本稿は国立公園協会が取り組んだ国立公園絵画制作の意義、小杉放菴画伯の関わり、絵画制作の経緯などを論じることを目的とする。また、小杉放菴画伯の画業に関する解説¹⁾には、国立公園との関わりはほとんど触れられていないので、小杉放菴画伯の国立公園との関係について考察する。

2. 国立公園絵画制作の始まり

1931年(昭和6年)4月1日に「国立公園法」が制定され、内務省によって国立公園の指定準備が進捗して

いる時期、国立公園協会は機関誌「国立公園」の発行、協会役員によるラジオ出演、講演会開催、新聞紙上への寄稿、国立公園候補地への団体旅行など、国立公園を啓発する多彩な事業を行った。1931年(昭和6年)6月の常務理事会では、啓発事業として国立公園候補地の風景を画家に描いてもらい、候補地を絵画で紹介する展覧会を開催する計画を決めた。

絵画制作については、内務省衛生局の国立公園主管課長などを経て、宮城県知事や広島県知事を務めた絵画通の湯沢三千男(後に内務次官、東条英機内閣で内務大臣、戦後は参議院議員)が提唱したとされているが²⁾、当時の国立公園協会会長は文化人でもある細川護立貴族院議員、副会長は国立公園研究の先覚者である東京帝国大学教授本多静六博士、内務次官潮恵之介、常務理事は後に国立公園の父と言われるようになる田村剛博士などであった。

国立公園協会は、この絵画制作計画を実施するに当たり、昭和6年秋口に東京美術学校(現：東京芸術大学)の正木直彦校長、石井柏亭、梅原龍三郎、小杉放庵(後に小杉放菴)、満谷國四郎、和田英作、和田三造の画壇の指導者ともいえる錚々たる7名に参会してもらい、展覧会開催について協議を行った結果、大家に揮毫を委嘱することになった。

国立公園協会が、絵画制作事業に取り組む最初の段階で、画壇の指導的な方々に相談し、実力のある一流画家により国立公園の風景が描かれたことが、その後継続された絵画制作に影響をもたらし、文化的に高い価値をもつ国立公園絵画を今日に残すことになった大きな要因と言える。

また、絵画に造詣の深い湯沢三千男は、日光に近い栃木県上都賀郡加蘇村(現在の鹿沼市)の出身で画家との親交があり、同じ栃木県上都賀郡の日光町(現在の日光市)出身で同郷ともいえる小杉放菴とも親交があったこと³⁾が、絵画制作がスムーズに進んだ要因の一つになっていたように思われる。

国立公園協会では、昭和7年春に絵画展開催を考えていたが、協議の結果、春の開催では四季の風景が揃わないため、展覧会は一年後の秋に開催することになり、作品を夏までに制作することになった。

揮毫は一カ所の国立公園候補地について2～3名の画家に委嘱し、一人1作品、絵の大きさは25号(65.2cm×80.3cm)とすることになった。また、作品の売約や旅費は国立公園協会が斡旋し、展覧会は東京以外に地方でも開催することなどを決めた。絵画制作は、朝鮮半島の金剛山国立公園候補地、台湾の新高及阿里山国立公園候補地と太魯閣峡国立公園候補地を加えることにした⁴⁾。

早速、画家の人選が行われ、協議に集まった画家をはじめ、有島生馬、岡田三郎助、中澤弘光、藤島武二、満谷國四郎、森田恒友、安井曾太郎、山下新太郎、山本鼎、柚木久太、吉田博など名声と実力を備えた最高の画家が選ばれた。小杉放菴の知友の画家が大勢入っており、小杉画伯が熱心に推薦されたのではないかと推測する。

「国立公園」誌に掲載されている記事には、委嘱を受けて、秋の風景を描こうと考えた画家は、早々に現地へ出かけ制作に取り組んでいる。「奥入瀬溪流の秋」を制作した大野隆徳画伯は、10月16日に東京を発って十和田湖へ赴き、10月末まで現地に滞在して写生を行った。大野画伯は十和田湖湖畔滞在中に、国立公園協会田村剛常務理事へ「十和田湖畔に出でて黄葉の美の稀に見る風景であるのを知りました。十和田湖は恐らく夏よりも春よりも秋が第一だと思ひます。いろいろの用事を割愛し、秋に来てよかったですと思ひます」と、現地で目にした風景の感想を伝えてきている。

また、日光国立公園の「秋の戦場ヶ原」を描いた田邊至画伯は10月24日に日光へ行っている。台湾と朝鮮半島の外地の国立公園候補地を揮毫する画家も、川島理一郎画伯が10月22日に朝鮮半島の金剛山へ、和田三造画伯が10月24日に台湾の阿里山へ出発した⁵⁾。

小杉放菴(放庵)画伯は、朝鮮半島の金剛山国立公園候補地の揮毫を引き受けており、昭和7年5月の新緑の季節に金剛山へ出かけて描いた〔補注1〕。

揮毫依頼をした作品は、1932年(昭和7年)10月の展覧会開催までに表-1の26作品が完成し、展覧会は10月7日から11日までの5日間、東京日本橋三越本店で開催された。1932年10月はまだ国立公園指定が行われる前だが、展覧会は国立公園候補地絵画展ではなく、「国立公園洋画展覧会」の名称で開催された。

前年4月に「国立公園法」が制定されて国立公園実現の期待が高まる中、山本達雄内務大臣、潮恵之輔内務次官も展覧会を参観し、会期中の10月8日に国立公園の箇所が確定したこともあって、連日鑑賞者が蝟集して大好評を博した⁶⁾。名声と実力のある一流画家が揮毫した26作品を鑑賞し、多くの人が感銘を受けると同時に、国立公園誕生への期待を大きくしたのではないと思われる。画家の選定が適切だったことが、展覧会好評の背景として大きかったと思われる。

展覧会は、東京に続いて10月末に大阪、11月中旬に高松と巡回し、当初の目的どおり国立公園の啓発に大きな役割を果たした。

揮毫を委嘱した画家には、小杉放菴の古くからの知友の画家が多数いる。画家を選ぶに当たり小杉放菴が積極的に協力し、交流を深めて築いていた豊富な人脈

表-1 1932年(昭和7年)10月の国立公園洋画展覧会に制作された絵画26作品

	作 品 名	画家名	候補地名	備 考
1	摩周湖	小林 萬 吾	阿 寒	
2	阿寒双湖臺より見たるパンケ・ベンケ	辻 永	阿 寒	○ 現存
3	八甲田の一角	柚 木 久 太	十和田	○ 現存
4	奥入瀬溪流の秋	大野 隆 徳	十和田	○ 現存
5	十和田湖	安井曾太郎	十和田	売約・○再揮毫作・落雷焼失
6	冬の中禅寺湖	石 井 柏 亭	日 光	
7	秋の戦場ヶ原	田 邊 至	日 光	○ 現存
8	雪解季の尾瀬沼	森 田 恒 友	日 光	
9	若葉の山中湖	正宗得三郎	富 士	○ 現存
10	春の富士	牧 野 虎 雄	富 士	○ 戦災焼失
11	箱根蘆の湖	南 薫 造	富 士	○ 戦災焼失
12	秋と白馬岳	山 本 鼎	日本アルプス	○ 現存
13	黒部峡谷鐘釣附近	山下新太郎	日本アルプス	○ 現存
14	劔山	吉 田 博	日本アルプス	○ 戦災不明
15	上高地大正池	中 澤 弘 光	日本アルプス	○ 現存
16	屋島山上の展望朝霧	藤 島 武 二	瀬戸内海	売約・○再揮毫作・現存
17	櫃石島の歸帆	満谷國四郎	瀬戸内海	○ 現存
18	朝の仙酔島	梅原龍三郎	瀬戸内海	売約・○再揮毫作・現存
19	大觀望より阿蘇山を望む	石 川 寅 治	阿 蘇	○ 現存
20	高森峠より見たる阿蘇山	岡田三郎助	阿 蘇	売約・○再揮毫作・落雷焼失
21	霧嶋山の初夏	丸 山 晚 霞	霧 島	○ 落雷焼失
22	霧嶋連山遠望	有 島 生 馬	霧 島	○ 現存
23	金剛山萬瀑洞	小 杉 放 菴	金剛山	朝鮮半島の候補地
24	金剛山の秋	川島理一郎	金剛山	朝鮮半島の候補地
25	阿里山の暮色	和 田 三 造	新高及阿里山	台湾の候補地
26	外太魯閣峽(臨海道路)	小 澤 秋 成	太魯閣峽	○ 台湾の候補地、戦災不明

注：「作品名」は展覧会の作品が絵葉書(国立公園協会指定版)になっており、絵葉書に印刷されている画題。「候補地名」は1931年(昭和6年)当時の国立公園候補地の名称。指定では「富士」は「富士箱根」、「日本アルプス」は「中部山岳」。備考欄の○印は1935年(昭和10年)9月内務省新庁舎に掲揚された作品。

が活かされているように思われる。

画家小杉放菴の人脈は、若いときから住まいを構え、その周辺に多くの画家や文士が集まった「田端文士芸術家村」で培われている。そのことを次に考察したい。

3. 小杉放菴と田端文士芸術家村—交流した人々—

1900年代の初め(明治の中頃)から1945年(昭和20年)にかけて、現在の東京都北区田端に画家、陶芸家、彫刻家、小説家、詩人、俳人など大勢の芸術家と文人が居住した地域があり、この地域を「田端文士芸術家村」と呼ぶようになった。

この文士芸術家村ができる発端は、1900年(明治33年)に栃木県日光町から上京した小杉放菴(本名は國太郎、当時の雅号は未醒)[補注2]が、田端163番地の

澤田家に寄宿して自炊生活を始めたことからである⁷⁾。この小杉放菴(未醒)が澤田家に寄宿した小さな火種が、狭い地域に日本を代表する文士や芸術家が集まることになった。当時の田端は郊外の農村地域であったが、上野に近いことから東京美術学校(現：東京芸術大学)へ入学したい学生や、卒業後に住む者がいたと言う⁸⁾。

小杉放菴(未醒)が澤田家に寄宿してから3年後の1903年(明治36年)に、放菴の寄宿先から近い田端512番地に、近代陶芸界の先駆的指導者として活躍し、文化勲章を受章した陶芸家板谷波山が転居してきた。板谷波山は、ここに窯を築いて作陶を行った。小杉放菴と板谷波山は親しく交流し、小杉放菴(未醒)が瀟湘八景の絵を描き、板谷波山が焼いた白磁の扇形8枚揃いの皿が、「北区立田端文士村記念館」(写真-1)に展示されている。



写真-1 北区立田端文士村記念館

小杉放菴(未醒)は、1907年(明治40年)に寄宿先から100mほど離れた田端155番地(現在：北区田端3丁目16番地)の谷田川という小川の畔に家を建てて転居し、ここに1945年(昭和20年)まで住んだ。その放菴(未醒)の家の隣には、1929年(昭和4年)に漫画「のらくろ」の作者である田河水泡が転居してきた。田河水泡宅の住所は、小杉放菴(未醒)宅と同じ田端155番地である。谷田川は1931年(昭和6年)に改修されて暗渠になり、川の跡は道路になった。

小杉放菴は、太平洋戦争が激しくなった1945年(昭和20年)3月に新潟県妙高高原赤倉にある別荘(安明荘)に疎開した。

田端文士芸術家村と呼ばれる一帯は、1945年(昭和20年)4月に空襲で焼け、小杉放菴の家も焼失したため、放菴画伯はその後妙高高原赤倉の別荘に定住した。この昭和20年4月の空襲で、田端は壊滅的な被害を受け、住まいを構えていた多くの芸術家、文人は田端を離れて疎開し、終戦後は戻ってこなかったために、文士芸術家村は再興しないままになった。

明治から昭和にかけ、田端文士芸術家村に住まいを持った芸術家や文人は、100名近くにもなる。

洋画家では、小杉放菴(明治33年転入)、山本鼎(明治44年転入)、柚木久太(明治45年転入)、倉田白羊(大正2年転入)、村山槐多(大正3年転入、小杉放菴(未醒)宅に下宿)、田邊至(大正3年転入)、吉村芳松(大正3年転入、田邊至の義弟)、吉田博(大正5年転入)、石井柏亭(大正5年転入)、石井鶴三(大正5年転入)、寺内萬治郎(大正7年転入)、この他放菴と交流の深かった森田恒友(転入年不詳)も住んでいた。

小説家・詩人・俳人には、二葉亭四迷、直木三十五、芥川龍之介、室生犀星、サトウ・ハチロー、野口雨情、菊池寛、久保田万太郎、堀辰雄、萩原朔太郎、佐多稲子、川口松太郎、村上元三など文壇を代表する人たちが短期間、長期間の別はあるが田端の狭い

範囲に集まっていた⁷⁾。

小杉放菴は、こうした田端に集まって住んでいた芸術家、文人と様々な形で交流を深めた。

その一つは1910年頃(明治43年頃)、小杉放菴を中心に親交の深い森田恒友、山本鼎、倉田白羊、満谷國四郎、藤井浩祐たち画家が集まり、田端の高台に借地をしてテニスコートを作り、木造のクラブハウスを建て、親睦の場として「ポプラ倶楽部」というテニスの会を設立した。「ポプラ倶楽部」の名称は、小豆島からポプラを取り寄せて敷地周囲に植えたことに由来している。

「ポプラ倶楽部」は、後に国内有数のテニスクラブとして知られるようになり、一般の会員も増え、倶楽部主催の大会を開催するようになっていく。小杉放菴は、倶楽部を作ってからテニスを始めたというが、倶楽部主催の大会だけでなく、様々な大会へ出場して優勝する腕前だった〔補注3〕。小杉放菴はテニスのほかにも野球、スキー、登山などスポーツを行っていたことが「北区立田端文士村記念館」の展示説明にある。後に妙高高原に別荘を建てたことからみても、自然に親しんでいたことが分かる。

また、田端には「道閑会」という文人、芸術家が集まる飲食歓談の会があり、芥川龍之介、久保田万太郎、小杉放菴、森田恒友、山本鼎、北原大輔(美術評論家・画家)、香取雅彦(鍍金家)、脇本楽々軒(美術史学者)、下島薫(医師、書家)、鹿島龍藏(実業家、書、テニスなど趣味が広く、文人・芸術家の集いを支えた)などが集い、小杉放菴は人脈を広げた。

この他に、小杉放菴の家で行われた中国古典の勉強会「老荘会」がある。この会には、文士芸術家村の外部からも大勢の参加者がいたが、文士芸術家村に住んでいる石井鶴三、鹿島龍藏らが参加していた。

小杉放菴は、文筆面でも若い時から友人、知人の深い人脈ができていて、例えば1905年(明治38年)に鹿子木孟郎、石井柏亭、平福百穂らと美術雑誌「平坦」を創刊し、1907年(明治40年)からは石井柏亭、森田恒友、山本鼎、倉田白羊、坂本繁二郎らの同人美術文芸誌の「方寸」に参加して挿絵を描いた。

1914年(大正3年)には横山大観に誘われて日本美術院の再興に参加し、洋画部を主宰することになり、友人である洋画家森田恒友、山本鼎、倉田白羊、足立源一郎、長谷川昇らを誘っている。この日本美術院洋画部を支えた小杉放菴、森田恒友、山本鼎、倉田白羊、足立源一郎、長谷川昇に梅原龍三郎が加わり、1922年(大正11年)に美術団体「春陽会」が創立され、創立翌年には石井鶴三も会員になった。

「春陽会」のメンバー森田恒友、山本鼎、倉田白羊、

石井鶴三らとはポプラ倶楽部、道閑会、老荘会で親交を深めた友人であり、小杉放菴は1964年(昭和39年)に亡くなるまで「春陽会」に所属して活動した。

こうして小杉放菴は、田端文士芸術家村での多くの画家、陶芸家、彫刻家、小説家、実業家などとの交流をとおり人脈が培われたと思われる。

国立公園協会が、1931年(昭和6年)に国立公園候補地の絵画制作に取り組むに当たり、本多静六副会長、田村剛常務理事ら協会役員と、小杉放菴を含め7名の画壇の大家が協議して選んだ画家に、田端文士芸術家村で小杉放菴が親しく交流していた画家、森田恒友、山本鼎、石井柏亭、満谷國四郎、長谷川昇、柚木久太、また、画塾「不同舎」で共に学んだ石川寅治らも入っており、小杉放菴が推薦されていることと思う。

次に国立公園協会役員の本多静六副会長、田村剛常務理事らと画家小杉放菴とが交流する接点を考察したい。

4. 「日本八景」の選定委員を務めた本多静六・田村剛・小杉放菴(放庵)

1927年(昭和2年)に大阪毎日新聞と東京日日新聞の主催、鉄道省後援により「日本八景」の選定が行われた。

「日本八景」は、「山岳」、「溪谷」、「湖沼」、「河川」、「海岸」、「平原」、「瀑布」、「温泉」の八つの優れた景勝地を選定するというもので、一般公衆が葉書で推薦し、八つの景勝別に上位10位までを候補地にして、選定委員会で決定する方式で行われた。葉書の推薦は日本三景(松島、天橋立、厳島)と富士山は別格として除くルールで、推薦期間は昭和2年4月11日から5月20日までの40日間だった。

新聞社が選定委員の中に国立公園の調査を兼ねている委員がおり、国立公園選定との関係を示唆する記事を掲載したことも刺激になり、推薦葉書は約9,342万4千通も集まり、当時としては破格の枚数になった。

1927年(昭和2年)は国立公園制度が制定される前だが、内務省が16カ所の国立公園候補地を調査中であり、選定委員に国立公園調査の関係委員がいることが分かったため、国立公園指定との絡みで、景勝地の地元では葉書推薦を呼びかける運動が起こるなど競争が過熱した。

「日本八景」の選定委員は、学識者、行政関係者、登山家、事業家、小説家、詩人、洋画家、日本画家、政治家など49名が委嘱されていた。国立公園候補地調査との関係では、内務省地方局長の潮恵之介(後に内務次官)、本多静六博士、田村剛博士、この他国立公園に関する学識者に地質学者の脇水鉄五郎博士、湖

沼学者の田中阿歌磨博士が委員になっていた。この5名の委員は、この年の12月に設立した国立公園協会の発起人になった方々である。

洋画家の選定委員は、石井鶴三、岡田三郎助、小杉放菴(放庵)、藤島武二、三宅克巳、森田恒友、吉田博、和田三造の8名である。この8名の中の岡田三郎助、小杉放菴(放庵)、藤島武二、森田恒友、吉田博、和田三造の6名は、後日(昭和6年)国立公園協会から国立公園候補地の絵画揮毫の委嘱を受けている。

国立公園協会設立後に副会長や常務理事に就任する内務省の潮恵之介、本多静六博士、田村剛博士らと、著名な洋画家たちが「日本八景」の選定で顔を合わせ交流したものと思う。

特に、小杉放菴(放庵)は、郷里の日光で大日光国立公園期成会のパンフレット作成で表紙絵を描くなど、国立公園運動に関わった経験があり⁹⁾、内務省の潮恵之介、本多静六博士、田村剛博士らとの選定委員会で、画家の視点での選定とともに、若い時からスキー、登山など自然に親しんでいたため、国立公園の視点も意識したことと思われる。

「日本八景」は、「山岳」：温泉岳、「溪谷」：上高地、「湖沼」：十和田湖、「河川」：木曾川、「海岸」：室戸岬、「平原」：狩勝峠、「瀑布」：華厳滝、「温泉」：別府温泉の八景が選定され、1927年(昭和2年)7月6日に発表された。

選定された「日本八景」では、温泉岳(雲仙天草国立公園)、上高地(中部山岳国立公園)、十和田湖(十和田八幡平国立公園)、華厳滝(日光国立公園)の4カ所が国立公園に指定されている。

5. 国立公園協会の国立公園絵画制作と小杉放菴画伯の作品の行方

国立公園協会が1931年(昭和6年)秋に揮毫依頼をした絵画は、昭和7年10月に表-1で示した26作品が完成し、東京日本橋三越で「国立公園洋画展覧会」が開催された。小杉放菴(放庵)の作品は、朝鮮半島の金剛山国立公園候補地を描いた「金剛山萬瀑洞」である。

国立公園協会は、展覧会の26作品を「国立公園協会指定版」と印刷した絵葉書を作成した。小杉放菴(放庵)の「金剛山萬瀑洞」も図-1に示す絵葉書になっている。この作品は、1932年(昭和7年)5月の萬瀑洞新緑の風景である。

「国立公園洋画展覧会」の出展絵画は画家の所有で、国立公園協会は売約の斡旋を行うことになっていたことから、安井曾太郎「十和田湖」、藤島武二「屋島山上よりの展望朝霧」、梅原龍三郎「朝の仙酔島」、岡田三郎助「高森峠より見たる阿蘇山」の4作品が売約と

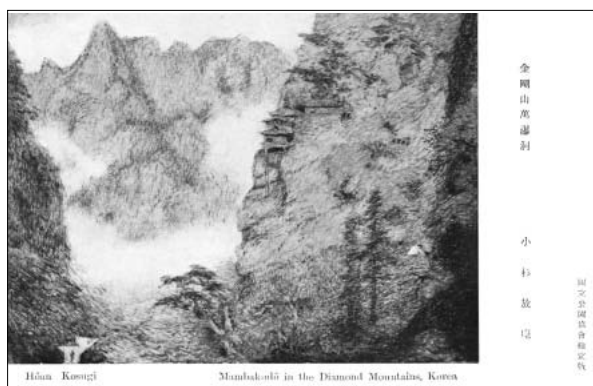


図-1 小杉放庵「金剛山萬瀑洞」(国立公園協会指定版絵葉書)



図-2 安井曾太郎「十和田湖」(国立公園協会指定版絵葉書)・展覧会で売約になった

なり、また作品は展覧会終了後に画家に戻されたため、国立公園協会には残らなかった。

展覧会で売約になった安井曾太郎の作品「十和田湖」は、図-2に見る絵で国立公園協会指定版絵葉書になっていて貴重だ。この絵画は、現在、伊豆下田の郊外にある上原近代美術館が所蔵している¹⁰⁾[補注4]。

展覧会終了後に作品が画家へ戻された後、国立公園絵画がこのまま散逸してしまうのはいかにも惜しいので、内務省新庁舎〔補注5〕に掲揚して国立公園の紹介、啓発に活用するという絵画保存計画が発案され¹¹⁾、地方関係者の協力を得て作品の寄贈を受け、1935年(昭和10年)9月に内務省新庁舎への掲揚が実現した。

このとき、展覧会后に画家へ返却されたまま、画家の手元に置かれた作品が6点あり、全作品を集めることはできなかった。また、展覧会の作品が、朝鮮半島と台湾の国立公園候補地だった小杉放庵(放庵)、和田三造、川島理一郎の3画伯の絵は、内務省庁舎に掲揚

された時、別の国立公園絵画に変更されていた。なお、展覧会で売約になった4作品の画家には、再度揮毫依頼を行い出来上がった作品が掲揚された。

展覧会での小杉放庵(放庵)の作品は「金剛山萬瀑洞」だったが、内務省新庁舎へ掲揚した作品は「日光」である。この「日光」という作品は、内務省に保管されていたが太平洋戦争の戦災で焼失し、作品の詳細が分からない状態である。展覧会に出された「金剛山萬瀑洞」の方も、小杉放庵記念日光美術館がまとめている小杉放庵画伯に関する様々な資料に、この作品に該当する記載がなく、その後どのようになったか不明である。

1932年(昭和7年)10月の展覧会后、絵画が描かれていない候補地の地元からは、国立公園協会へ絵画制作の強い要望があり、本多静六副会長、田村剛常務理事ら協会役員と先の7名の画家たちが、1933年(昭和8年)10月25日に内務省会議室でこの要望について再

表-2 1932年(昭和7年)10月の展覧会后1935年(昭和10年)9月までに制作された絵画12作品

	作品名	画家名	国立公園名	備考
1	摩周湖	上野山清貢	阿寒	○ 現存
2	大雪山(大雪山の遠望)	中村研一	大雪山	○ 現存
3	(然別湖畔)	長谷川昇	大雪山	○ 戦災不明
4	日光(初夏の尾瀬沼)	小杉放庵	日光	○ 戦災焼失
5	中部山岳	和田三造	中部山岳	○ 現存
6	吉野連山(大峰山上の日の出)	鹿子木孟郎	吉野熊野	○ 現存
7	瀨八丁(瀨峡)	奥瀬英三	吉野熊野	○ 現存
8	(勝浦海岸)	奥瀬英三	吉野熊野	○ 戦災不明
9	(剣ヶ峰)	吉田博	大山	○ 戦災焼失
10	大山(早春の大山)	香田勝太	大山	○ 現存
11	阿蘇久住山	川島理一郎	阿蘇	○ 戦災焼失
12	雲仙・春(躑躅の雲仙)	石井柏亭	雲仙	○ 現存

注：作品名のカッコは内務省庁舎掲揚時の画題。国立公園名は絵画制作時の名称。備考欄の○印は1935年(昭和10年)9月内務省庁舎に掲揚。小杉放庵の作品名は「内務省新庁舎に掲揚せる国立公園洋画」のリスト(国立公園第7巻第9号)に「初夏の尾瀬沼」とある。川島理一郎の作品名は不明確

び協議を行い、大雪山、吉野熊野、大山、雲仙の各国立公園の絵画制作を決めた¹²⁾。これで戦前指定の12国立公園全ての絵画が揃うことになり、内務省新庁舎へ絵画を掲揚した1935(昭和10年)9月までに表-2の作品が制作された。

その後、1938年(昭和13年)に内務省から厚生省が独立した際、国立公園行政は厚生省所管となり、国立公園絵画は厚生省と内務省に分けて保管することになった。

ところが、1940年(昭和15年)6月20日に、厚生省庁舎が落雷延焼被害に遭うという災難が発生し、厚生省に保管していた安井曾太郎「十和田湖」、岡田三郎助「高森峠から見たる阿蘇山」、丸山晚霞「霧島山の初夏」の3作品が焼失した。安井曾太郎「十和田湖」と岡田三郎助「高森峠から見たる阿蘇山」は、展覧会の作品が売約になったため、再度揮毫を依頼して制作した作品だったので、極めて残念なことになった。

太平洋戦争中の国立公園協会は、1943年(昭和18年)5月に国の健民政策に即応するため協会名を「国土健民会」と改称したが、終戦後は1947年3月に「国土健民会」を解散して「国立公園研究会」とし、1949年(昭和24年)12月に本来の「国立公園協会」の名称に戻した〔補注6〕。この太平洋戦争から戦後にかけての時期、国立公園絵画は国土健民会、国立公園研究会、再出発した国立公園協会へと受け継がれた。

国土健民会から国立公園研究会へ財産と事業を引き継ぐに当たっては、1947年(昭和22年)7月12日に、内務省へ国立公園絵画を一堂に集めて国立公園研究の資料として活用したいため、内務省が保管している絵画の返却を照会している。この照会に対し、昭和22年8月18日に内務省から絵画を返却するという回答と、昭和20年5月25日の空襲で保管していた絵画のうちの6作品が焼失したという焼失届けがあった。小杉放菴(放庵)の作品「日光」は、内務省に保管されていたが、戦災で焼失したと届け出があった6作品の中に入っていた〔補注7〕。

戦前指定の12国立公園の絵画は、表-1と表-2の38作品に展覧会で売約となり再度揮毫された4作品を加えて42作品が制作されたが、1932年(昭和7年)10月の展覧会後に画家に戻したままになった作品、1940年(昭和15年)の厚生省の落雷延焼被害で焼失した作品、1945年(昭和20年)に太平洋戦争の戦災で焼失や不明になった作品があり、戦前の作品で現在残っているのは21作品である。

6. 戦後の国立公園発展に関わった小杉放菴画伯

太平洋戦争の終戦を迎えたとき、国立公園行政はほとんど機能しない状態になっていたが、占領軍総司令部(G.H.Q)の指導の下で復活し、終戦翌年の1946年(昭和21年)には伊勢志摩国立公園を指定した。

また、1947年(昭和22年)に、戦時中廃止された国立公園の重要事項を審議する国立公園法に基づく「国立公園中央委員会」が復活した。さらに、1948年(昭和23年)には、厚生省に国立公園部が新設されるなど、国立公園行政は新時代の歩みを始めた。

昭和20年代中ごろになると、戦後の混乱から社会が徐々に立ち直り、国民の自然志向が高揚して国立公園利用者が増加し、国立公園は各地で観光振興の目玉として新規指定、既存公園の区域拡張が行われようになった。

小杉放菴(國太郎)は、昭和22年9月に復活した「国立公園中央委員会」の委員に田村剛、武田久吉、田部重治らとともに厚生大臣の進達によって内閣総理大臣から任命され、戦後の国立公園発展に関わることになった。

この「国立公園中央委員会」委員就任に当たり、小杉放菴は厚生省から手続き書類として履歴書等の提出を求められ、小杉画伯は厚生省担当者へ「この種の書類づくりは大骨が折れ、履歴の帝国芸術院会員就任の年月は、一向に記憶に無く困ったので、文部省芸術院へ問い合わせただかかないとらちがあかない」と手紙を出している。委員就任に必要な書類作成に苦勞しながらも誠実に対応し、国立公園中央委員会委員の任命を受けた。

また、小杉放菴は、国立公園協会が太平洋戦争中に休刊を余儀なくされた、機関誌「国立公園」を1948年(昭和23年)8月に復刊したとき、復刊1号に「裏日光」という一文を寄稿し、国立公園協会の機関誌再出発に力を貸している〔補注8〕。小杉放菴のこうした動向からは、戦後の国立公園の復活と発展、国立公園啓発に気遣いをしていたことを伺い知ることができる。

小杉放菴は、郷里の日光で国立公園運動に関わり、国立公園との関係もあった日本八景の選定委員を行い、国立公園協会が企画した国立公園候補地の絵画制作に協力し、戦後は国立公園中央委員会委員に就任するなど、様々な形で国立公園と関わりをもち続けた画家である。

7. 国立公園法20周年記念事業の国立公園絵画制作と小杉放菴画伯

1951年(昭和26年)に国立公園法制定20周年を迎えた。厚生省国立公園部は、国立公園協会と共同で記念事業を行う計画をたて、「国立公園写真集」、「日本の国立公園」、「国立公園のはなし」、「国立公園ガイドシリーズ」などの図書出版、「国立公園絵画の制作」、「国立公園絵画展の開催」などを企画した。

国立公園絵画制作は、戦前の絵画で厚生省の落雷延焼被害で焼失した絵画と太平洋戦争で失った絵画を補完すること、戦後に指定した伊勢志摩、支笏洞爺、上信越高原、磐梯朝日、秩父多摩などの国立公園と、区域拡張を行った公園の絵画を制作し、国立公園の紹介、宣伝媒体として活用することを目的とした。

厚生省国立公園部で担当したのは、絵画に明るい林静一郎事務官で、絵画制作案の作成では、「いやしくも絵画である以上、単に記録的意味に止まることなく、芸術的価値を優先すべきこと、又表面は協会の仕事であっても、半ば国の事業である以上、人選は最も公正に、一党一派に偏しないことを期せねばならず、画家の持味にマッチした風景を割当てることがも重大な作業である」¹³⁾と考え、揮毫を依頼する画家の案を作った。戦前の作品が焼失した画家には、既に亡くなっている画家がいたが、健在の画家は揮毫をお願いする方針とした¹⁴⁾。この考えに基づいて作成した案は一流画家の名が並んだ。

国立公園法20周年記念事業の絵画制作は、手順として1952年(昭和27年)春に国立公園協会の理事会、評議員会に提案して可決した後、5月に都道府県国立公園関係課長会議に諮って承認を得、その後9月に絵画制作を行う都道府県の知事に協力を要請する公文書を出し、完成した作品は国立公園協会が所蔵する方式で実施された。

画家への依頼、制作過程の連絡調整なども林静一郎さんが行うことになり、林さんは1952年(昭和27年)7月4日から画家への依頼を始め、その後9月末までの2カ月ほどは東奔西走して画家を訪ね歩いて揮毫依頼を行った。洋画壇の大家一人ひとりを訪ねての依頼は「正直のところ相当にびくびくものであった」と述懐をしている¹³⁾。

最初に訪ねたのは、7月4日に静岡県清水市に在住する画壇長老の和田英作画伯である。記念事業で絵画制作を行う趣旨に、和田画伯から賛同を得て胸をなでおろしたが、和田英作画伯の賛同は1931年(昭和6年)の絵画制作で立派な作品ができた実績がものをいっと「国立公園」誌に書いている¹³⁾。

和田英作画伯は、1931年(昭和6年)に国立公園協会が、画壇の大家7名と協議したときの一人であり、そのとき良い作品ができたことと、その後の作品の保管努力なども評価されたのではないと思われる。

また、8月下旬に福岡県八女に坂本繁二郎画伯を訪ねたときは、戦前の岡田三郎助が描いた阿蘇国立公園の作品が、昭和15年に焼失した替わりのお願いだっただが、坂本画伯から「私の絵でよいのならば」と快諾の言葉を得てホッとしたと書いている。林さんは東京から福岡県八女まで夜行列車で行った。昭和26年当時の夜汽車での東京から福岡までは長時間の旅行となり、林さんは疲れはてての訪問だったが、坂本画伯の家で八女茶の玉露のもてなしを受け嬉しかったと述べている¹³⁾。

記念事業での絵画制作の目的の一つである、戦前の作品が焼失した画家への依頼では、安井曾太郎画伯が作品「十和田湖」が焼失していたため、7月下旬に訪ねて揮毫の依頼をしたが、安井画伯は健康を理由に辞退された¹⁴⁾。

また、小杉放菴画伯も作品「日光」が焼失しており、林さんは8月中旬に1944年(昭和19年)に東京田端の自宅から妙高高原赤倉へ疎開していた小杉画伯を訪ね、郷里日光国立公園「中禅寺」の揮毫を依頼した。小杉画伯には、その後も書面の連絡を続けた結果、1953年(昭和28年)4月中旬に書簡で、初夏の頃の湖山を描きに日光へ赴きたいと厚生省国立公園部に伝えてきた。

この書簡で小杉放菴画伯が、国立公園法20周年記念事業の絵画制作を引き受け、揮毫する季節までも伝えてきたので、国立公園部と国立公園協会は小杉画伯の絵が補完できることに安堵した。しかし、その後4月末に健康状態が思わしくなく、しばらく山村で静養の日を送ることを決めたので、思い迷っていたが制作を辞退したいという手紙が届いた。

厚生省国立公園部と国立公園協会では、今回の企画は国立公園制度創設記念であり、洋画壇を代表する方々をほとんど網羅しており、画壇長老の小杉放菴画伯の作品を逸するのは残念なので、健康回復後でよいから委嘱したいとお願いの書面を送った。

この書面に対し、小杉画伯から5月24日付の返信があり、その中で中禅寺、湯元の山谷に題材を求めたいが、健康が伴わないと再度の辞退を伝えてきた。厚生省国立公園部と国立公園協会は、再度の辞退にやむを得ず小杉放菴画伯への委嘱を断念した。

国立公園法20周年記念事業で制作した絵画は、1953年(昭和28年)9月に31作品が完成した。

国立公園協会は、新作品31点と、戦前の作品で戦



図-3 林武「十和田湖」(十和田八幡平国立公園)・国立公園法20周年記念で制作(国立公園協会絵葉書)

後に残った21作品を合わせ、戦後初の国立公園絵画展を、1953年(昭和28年)9月15日から20日までの6日間、国立公園協会・毎日新聞社共催、厚生省・文部省後援により日本橋三越で開催した。展覧会は東京に続いて大阪、札幌、高松、福岡と巡回し大好評を博し、絵画は国立公園の紹介と宣伝に貢献した。

多くの新聞社がこの戦後初の国立公園絵画展を取り上げ、美術評論家による評論を掲載し、美術芸術の上で大きな反響を呼んだ。それは、林武「十和田湖」(図-3)、小山敬三「浅間山」、中村善策「尾瀬沼」、佐竹徳「清津峡」、鈴木千久馬「奥秩父雲取山頂より」、川島理一郎「芦ノ湖の夕照」、和田英作「三保富士」、小糸源太郎「鳴門」、須田国太郎「春の来島海峡」、野口彌太郎「雲仙・夏」、海老原喜之助「大華山」、田崎廣助「久住山」、坂本繁二郎「暁明の根子岳」など31作品もの風景画の力作が一度に生まれ、画家の代表作となる秀作が多数あったからである。

この展覧会のとき画集が発行され、近代美術館今泉篤男次長がこの画集に「…この種の作品に対しては、画家は何となく俗受けを狙った描きぶりを示しがちなものだが、この国立公園の作品にはそれがない。それぞれの力量のうちで、力いっぱいの仕事ぶりを見せており、なかなかの力作が揃っている。ぶつかっている風景に対しても、従来の名所絵の観念から完全に脱して、自分のスタイルの中で消化したモチーフとしている点、私は画家たちの態度に敬意を表するに吝かではない。」と評を寄せていることを林静一郎さんが「新作を加えた国立公園絵画制作の経緯と意義」の中で紹介している¹⁵⁾。

記念事業の絵画制作は、戦前の作品が焼失した小杉放菴の作品を補完する絶好の機会だった。小杉放菴

は、厚生省国立公園部と国立公園協会宛の手紙の中で、最近では油絵を描くことが少なくなっていることを書きながらも、郷里の絵を描きたいと意欲を示していただけに、健康が問題となり格好の機会を失うことになった。

もう一つ、小杉放菴の揮毫が実現しなかったことへの残念な理由がある。それは、国立公園協会が絵画制作を始めるに当たり、画壇の大家7名に相談したが、正木直彦東京美術学校校長以外の6名は画家の小杉放菴(放庵)、石井柏亭、梅原龍三郎、満谷國四郎、和田英作、和田三造である。現存する国立公園絵画80作品には、この6名のうち小杉放菴を除く5名の作品があり、小杉放菴の作品だけが無い。このことを考えると、国立公園絵画制作に最初から関わった6名の画家のうち小杉放菴の作品だけが無いことになり、大変残念なのである。

8. 1955年(昭和30年)以後の絵画制作

国立公園協会は、1955年(昭和30年)以後も新規指定の国立公園と、既設国立公園の区域拡張地域の絵画制作を継続した。

1955年以降になると、戦後10年が経過して混乱していた社会が立ち直り、次第に経済高度成長の時代へと進み、国民の野外レクリエーションや旅行が盛んになり、観光事業が地域発展に大きな効果をもたらす時代になった。この社会現象の受け皿として、国立公園は観光客誘致の資源として大きな役割を果たした。

各地で国立公園の誘致運動が盛んになり、また、社会の自然を評価する視点が多様化して、新規の国立公園指定、既設国立公園の区域拡張が行われた。新規指定の国立公園では、昭和30年代(1955～1964年)は西海、陸中海岸、白山、山陰海岸、知床、南アルプスの6国立公園、昭和40年代(1965～1974年)は小笠原、西表、足摺宇和海、利尻礼文サロベツの4国立公園と、昭和30年代と40年代で10カ所もの国立公園が誕生した。この中には、白山国立公園、利尻礼文サロベツ国立公園のように国定公園から昇格した国立公園もある。

既設国立公園の拡張では、1955年(昭和30年)に富士箱根国立公園に伊豆半島が拡張され、公園名も富士箱根伊豆国立公園に変更された。翌1956年(昭和31年)には瀬戸内海国立公園に六甲地域、上信越高原国立公園に妙高、戸隠地域が拡張になり、十和田国立公園は八幡平地域が拡張され、公園名が十和田八幡平国立公園に変わった。雲仙国立公園も天草地域拡張で公園名が雲仙天草国立公園になるなど、大きな変化が

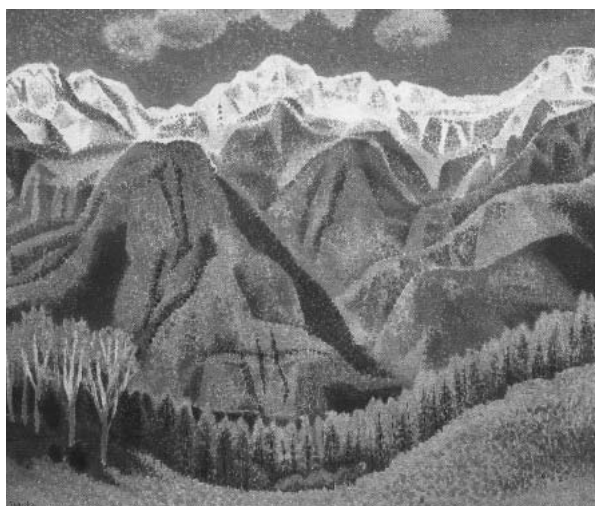


図-4 高田誠「夜叉神峠より見たる白峰三山」(南アルプス国立公園)・指定記念で制作(国立公園協会絵葉書)

あった。

その後も大規模な区域拡張が行われた大山国立公園が大山隠岐国立公園に、霧島国立公園が霧島屋久国立公園と公園名を変更している。

このように、1955年(昭和30年)頃からの急速な国立公園誕生に対し、国立公園協会は地元都道府県と連絡調整を行って絵画制作に臨み、一流の筆力ある画家を選んで揮毫を依頼し、1977年(昭和52年)にかけて29作品を制作した。

福沢一郎「奥秩父両神山」、中村琢二「妙高山」、三岸節子「天草」、新道繁「西伊豆の海」、牛島憲之「日御碕」、田村一男「三瓶山」、鬼頭鍋三郎「柴山湯の白山」、吉井淳二「屋久島永田岳」、服部正一郎「知床」、高田誠「夜叉神峠より見たる白峰三山」(図-4)、芝田米三「夕日宇和海」、山本貞「仲間川原生林」などの力作が誕生した。この29作品を加えて国立公園絵画は78作品になり、立派な国立公園絵画コレクションになった。

その後は絵画制作が行われない時期が続いたが、1987年(昭和62年)に20年ぶりに釧路湿原国立公園が指定され、1988年(昭和63年)に松樹路人「湿原の夕映え」が79点目の作品として制作された。また、2009年(平成21年)に瀬戸内海国立公園小豆島の風景を描いた神下雄吉「寒霞溪紅葉」が加わり、国立公園絵画は表-3の80作品になった。「寒霞溪紅葉」は国立公園協会が最後に所蔵した作品である。

近年は、国立公園を所管する環境省が国立公園の見直しを行い、既設国立公園を2つの国立公園に分離することが続いた。2007年(平成19年)に日光国立公園から尾瀬が分離して日光国立公園と尾瀬国立公園の2公園になったのをはじめ、2012年(平成24年)に霧島



図-5 中村善策「尾瀬沼」(尾瀬国立公園)・日光国立公園のとき制作(国立公園協会絵葉書)

屋久国立公園が霧島錦江湾国立公園と屋久島国立公園の2公園になり、2015年(平成27年)には上信越高原国立公園が上信越高原国立公園と妙高戸隠連山国立公園の2公園になった。これらの国立公園の絵画は、図-5のようにいずれも旧国立公園のときに制作されており、国立公園絵画コレクションに入っている。

国立公園協会が2012年3月末に解散した後、2014年(平成26年)3月5日に慶良間諸島国立公園、2016年(平成28年)9月15日にやんばる国立公園が新たに誕生したが、この2カ所の国立公園の絵は国立公園絵画80作品の中には無いことになる。

9. まとめ

1) 絵画制作の端緒と小杉放菴画伯

国立公園協会が1931年(昭和6年)から制作を始めた国立公園絵画は、2012年(平成24年)に国立公園協会が解散するまで、約80年の間に約100作品が制作された。

ところが、昭和7年に制作された絵画は展覧会で4作品が売約になり、展覧会後は画家へ作品が戻された。その後絵画保存計画が発案され、内務省庁舎に保存掲揚することになって集めたとき、画家の手元に置かれた絵画が6作品ある。また、厚生省で保管していた絵画が庁舎の落雷延焼被害で3作品が焼失し、太平洋戦争中には内務省で保管していたうちの数点が戦災で焼失または不明になった。こうした変遷があって、現在は80作品が存在する。

国立公園協会の絵画制作の始まりは、国立公園の啓発活動の一つとして、国立公園指定が始まる以前の昭和6年に、国立公園候補地の紹介と宣伝を目的に絵画

表-3 現存する国立公園絵画80作品(1)

	公園名	作品名	画家名	制作年	大きさ
1	利尻礼文サロベツ	サロベツ原野より利尻礼文を望む	中根 寛	1977年(昭和52年)	F25号
2	知 床	知床	服部正一郎	1968年(昭和43年)	F25号
3		羅臼岳	鈴木良三	1968年(昭和43年)	F25号
4	阿 寒	摩周湖	上野山清貢	1932年(昭和7年)頃	F25号
5		双湖台より見たるパンケ・ベンケ	辻 永	1932年(昭和7年)	P25号
6	釧路湿原	湿原の夕映え	松 樹 路 人	1988年(昭和63年)	F25号
7	大雪山	愛別岳・比布岳	足立源一郎	1953年(昭和28年)	F25号
8		大雪山	中村研一	1934年(昭和9年)頃	F25号
9	支笏洞爺	支笏湖畔	栗原 信	1953年(昭和28年)	F25号
10		洞爺湖	大久保作次郎	1953年(昭和28年)	F25号
11	十和田八幡平	八甲田の一角	柚木久太	1932年(昭和7年)	F25号
12		奥入瀬溪流の秋	大野隆徳	1932年(昭和7年)	F25号
13		十和田湖	林 武	1953年(昭和28年)	F25号
14		八幡平	北川民次	1957年(昭和32年)	F25号
15	三陸復興	浄土ガ浜	向井潤吉	1957年(昭和32年)	F25号
16	磐梯朝日	月山	木下義謙	1953年(昭和28年)	F25号
17		裏磐梯	斎藤 與 里	1953年(昭和28年)	F25号
18		荒川溪谷	寺内萬治郎	1953年(昭和28年)	F25号
19	日 光	那須	中野和高	1953年(昭和28年)	F25号
20		塩原の溪流	猪熊弦一郎	1953年(昭和28年)	F25号
21		秋の戦場ヶ原	田邊 至	1932年(昭和7年)	F25号
22		中禅寺湖	田辺三重松	1957年(昭和32年)	F25号
23	尾 瀬	尾瀬沼	中村善策	1953年(昭和28年)	F25号
24	上信越高原	清津峡	佐竹 徳	1953年(昭和28年)	F25号
25		発哺よりの展望	児島善三郎	1953年(昭和28年)	F25号
26		浅間山	小山敬三	1953年(昭和28年)	F25号
27	妙高戸隠連山	妙高山	中村琢二	1956年(昭和31年)	F25号
28	秩父多摩甲斐	奥秩父両神山	福沢一郎	1955年(昭和30年)	F25号
29		奥秩父雲取山頂より	鈴木千久馬	1953年(昭和28年)	F25号
30		梓山	中川紀元	1953年(昭和28年)	F25号
31	小笠原	小笠原父島から南島・母島を望む	三栖右嗣	1977年(昭和52年)	F25号
32	富士箱根伊豆	若葉の山中湖	正宗得三郎	1930年(昭和5年)	F25号
33		芦ノ湖の夕照	川島理一郎	1953年(昭和28年)	F25号
34		三保富士	和田英作	1953年(昭和28年)	F25号
35		西伊豆の海	新道 繁	1964年(昭和39年)	F25号
36	中部山岳	秋の白馬岳	山本 鼎	1932年(昭和7年)頃	F25号
37		黒部峡谷鐘釣附近	山下新太郎	1932年(昭和7年)	F25号
38		上高地大正池	中澤弘光	1932年(昭和7年)	P25号
39		中部山岳	和田三造	1932年(昭和7年)頃	F20号
40	南アルプス	夜叉神峠より見たる白峰三山	高田 誠	1977年(昭和52年)	F25号

絵画の大きさ(mm) : F20号=727×606、F25号=803×652、P25号=803×606

表-3 現存する国立公園絵画80作品(2)

	公園名	作品名	画家名	制作年	大きさ
41	白山	白水滝	田中忠雄	1964年(昭和39年)	F25号
42		柴山瀉の白山	鬼頭鍋三郎	1965年(昭和40年)	F25号
43	伊勢志摩	伊勢神宮	小磯良平	1953年(昭和28年)	F25号
44		英虞湾	川口軌外	1953年(昭和28年)	F25号
45	吉野熊野	吉野連山	鹿子木孟郎	1935年(昭和10年)頃	F25号
46		瀨八丁	奥瀬英三	1935年(昭和10年)頃	F25号
47	山陰海岸	鎧の袖	伊谷賢蔵	1967年(昭和42年)	F25号
48		鳥取砂丘	刑部人	1970年(昭和45年)	F25号
49	大山隠岐	大山	香田勝太	1935年(昭和10年)頃	P30号
50		日御碕	牛島憲之	1964年(昭和39年)	F25号
51		三瓶山	田村一男	1964年(昭和39年)	F25号
52		隠岐の朝暎	小野末	1964年(昭和39年)	F25号
53	瀬戸内海	新和歌ノ浦	鍋井克之	1953年(昭和28年)	F25号
54		摩耶山からの展望	野間仁根	1956年(昭和31年)	F25号
55		淡路島	田村孝之介	1953年(昭和28年)	F25号
56		鳴門	小糸源太郎	1953年(昭和28年)	F25号
57		寒霞溪紅葉	神下雄吉	2009年(平成21年)	F25号
58		屋島よりの展望	藤島武二	1932年(昭和7年)頃	P20号
59		櫃石島の帰帆	満谷國四郎	1932年(昭和7年)頃	F20号
60		琴平宮	高島達四郎	1953年(昭和28年)	F25号
61		朝の仙酔島	梅原龍三郎	1932年(昭和7年)頃	F25号
62		敵島	鈴木信太郎	1953年(昭和28年)	F25号
63		春の来島海峡	須田国太郎	1953年(昭和28年)	F25号
64		大華山	海老原喜之助	1953年(昭和28年)	F25号
65		姫島	宮本三郎	1953年(昭和28年)	F25号
66	足摺宇和海	夕陽宇和海	芝田米三	1977年(昭和52年)	F25号
67		足摺岬	岡田又三郎	1975年(昭和50年)	P25号
68	阿蘇くじゅう	由布岳	小林和作	1956年(昭和31年)	F25号
69		久住山	田崎廣助	1953年(昭和28年)	F25号
70		大観望より阿蘇山を望む	石川寅治	1932年(昭和7年)	F25号
71		暁明の根子岳	坂本繁二郎	1953年(昭和28年)	F20号
72	雲仙天草	雲仙・春	石井柏亭	1934年(昭和9年)	F25号
73		雲仙・夏	野口彌太郎	1953年(昭和28年)	F25号
74		天草	三岸節子	1956年(昭和31年)	F25号
75	西海	九十九島	黒田重太郎	1956年(昭和31年)	F25号
76	霧島錦江湾	霧島連山遠望	有島生馬	1931年(昭和6年)	F25号
77		霧島よりの展望	中山巍	1953年(昭和28年)	F25号
78		桜島	原精一	1967年(昭和42年)	F25号
79	屋久島	屋久島永田岳	吉井淳二	1966年(昭和41年)	F25号
80	西表石垣	仲間川原生林	山本貞	1977年(昭和52年)	F25号

絵画の大きさ(mm) : F20号=727×606、F25号=803×652、P20号=727×530、P25号=803×606、P30号=909×652

展を計画したことによる。この計画を実施するにあたり、画壇の大家7名に参会してもらって協議し、翌年10月に展覧会開催を決め、画家を選んで揮毫を依頼した。この時の7名の一人が小杉放菴である。

揮毫を依頼した画家には、小杉放菴が交流していた知友の画家が多数入っており、小杉放菴が積極的に画家の推薦をしたと思われる。小杉放菴自身も朝鮮半島の金剛山国立公園候補地を描いた。

国立公園絵画制作については、内務省で国立公園主管課長などを経て宮城県知事や広島県知事になった絵画通で画家との親交があった湯沢三千男(後に内務次官、東条英機内閣で内務大臣、戦後は参議院議員)が提唱していたとされる。湯沢三千男は栃木県出身で同郷の小杉放菴とも親交があり、小杉放菴は積極的に関わったのではないかと思われる。

国立公園協会が80年余にわたって継続的に制作した国立公園絵画は、精選された昭和の画壇を代表する画家が、国立公園の顔とも言える風景を描いた作品であり、このような絵画制作事業は2度とできないのではないかと思われる。

2) 絵画制作の時期

絵画制作は80年余にわたって継続された大きな文化事業といえるが、制作は大きく三つの制作期に分けることができる。

第一次制作期は1931～1935年(昭和6～10年)で、戦前指定の12国立公園の絵画42作品が制作された(このうち4作品は展覧会で売約になった)。絵画は朝鮮半島、台湾の国立公園候補地も揮毫された。

第二次制作期は1951～1953年(昭和26～28年)で、国立公園法20周年記念事業により31作品が制作された。この記念事業での絵画制作は、戦前に厚生省の落雷延焼被害や太平洋戦争下の戦災での焼失絵画の補完と、戦後指定の国立公園を描くものであった。

第三次制作期は1955年(昭和30年)以後、国立公園協会が解散した2012年(平成24年)までである。昭和30年代と昭和40年代は、新規の国立公園指定、既設国立公園の区域拡張が盛んに行われており、絵画は昭和30年代に14作品、昭和40年代に7作品が制作された。昭和40年代後半に指定された公園では、絵画完成が昭和50年代になっているものもあり、昭和50～52年の間に6作品が出来上がっている。こうして1955～1977年(昭和30～52年)にかけて27作品が制作された。

その後は、しばらく国立公園指定がなく、絵画制作も行われなかったが、1987年(昭和62年)に釧路湿原国立公園の指定で1作品、2009年(平成21年)に瀬戸



写真-2 小杉放菴画伯(小杉放菴記念日光美術館提供)

内海国立公園の1作品が追加され、第三次制作期は29作品が制作された。

この三つの制作期の特徴は、第一次制作期と第二次制作期は1～5年の短期間に30点を超える作品が作られ、第三次制作期は長い期間に亘って制作されていることである。また、第二次制作期は国立公園法20周年記念事業で制作が行われており、戦後の美術界に大きな反響があったことも制作上の大きな特徴になっている。

なお、国立公園絵画制作の最初から関わった小杉放菴の作品「日光」が太平洋戦争中に焼失しており、国立公園法20周年記念事業で補完が計画され、小杉放菴(写真-2)は依頼を引き受け制作の意欲はあったが、その後健康がすぐれないために辞退している。また戦前の作品「十和田湖」が焼失した安井曾太郎も健康を理由に辞退しており、両大家の作品を補完する機会を失したのは惜しまれる。

3) 国立公園絵画の特徴

国立公園絵画80作品は、国立公園協会の解散後に指定された慶良間諸島国立公園とやんばる国立公園の2公園を除く31国立公園の風景が網羅されている。

また、国立公園絵画の大きな特徴としては、絵の大きさが原則25号に統一されていること、一人1作品であること、全てが油彩であること、画壇には多くの会派があるが揮毫画家は一部の会派に偏っていないこと、文化勲章受章者、文化功労者、日本芸術院会員、様々な絵画賞受賞者の作品が多いことなどであり、文化的価値の高い国立公園の風景絵画コレクションであ

る。

4) 国立公園と小杉放菴画伯

小杉放菴画伯は、国立公園絵画制作の他にも、戦前は郷里日光での国立公園運動を支援し、戦後は1947年(昭和22年)に復活した国立公園法に基づく「国立公園中央委員会委員」への就任、国立公園協会再発足による機関誌「国立公園」復刊1号への寄稿など、国立公園の発展、啓発に熱心に関わった画家だった。

5) 国立公園絵画と日光市立小杉放菴記念日光美術館

80作品の国立公園絵画は、2012年(平成24年)3月末に国立公園協会が解散したとき、全作品が「日光市立小杉放菴記念日光美術館」へ寄贈され、現在は「日光市立小杉放菴記念日光美術館」に収蔵されている。

「日光市立小杉放菴記念日光美術館」は、日光市出身で名誉市民である小杉放菴画伯の業績を顕彰する美術館として、1997年(平成9年)10月に日光国立公園内に開館した。

国立公園協会が、国立公園絵画全作品を「日光市立小杉放菴記念日光美術館」へ寄贈したのは、日光市(旧：日光町)は本稿冒頭で述べたように、明治末に日本で最初に国立公園創設の請願を国会へ提出した国立公園史の上で縁りの都市であること、小杉放菴画伯が絵画制作の初期から関わっていたこと、国立公園内にある公立美術館であること、館内に十分な収納スペースのある収蔵庫があること、日光市・美術館共に国立公園絵画を積極的に国立公園啓発に活用する姿勢であること、などを評価したことによる。

寄贈を受けた「日光市立小杉放菴記念日光美術館」では、既に数回の国立公園絵画展を開催し、寄贈を受けた絵画を積極的に活用している。

2016年(平成28年)は、5月28日～7月10日の会期で「Selection 2016 国立公園絵画展」を行った。展示された国立公園絵画には、環境省日光自然環境事務所の協力により、画家が描いた風景の現地写真と風景解説が添えられ、絵画鑑賞と共に国立公園の理解が深まるように工夫した展示が行われた。この展覧会には、国立公園協会が揮毫依頼した作品ではないが、美術館所蔵の小杉放菴の作品「巖島風景」も展示された。「巖島風景」は瀬戸内海国立公園の風景である。

また、会期中の6月25日には、館内ホールで美術館と江戸川大学国立公園研究所の主催で「21世紀の国立公園、そして日光－絵画の風景から未来へ－」をテーマにフォーラムを開催し、国立公園絵画鑑賞とフォーラムへの参加という企画に日光市民をはじめ、遠来の利用者も多数参加していた。

国立公園協会は、所蔵した国立公園絵画による展覧会を各地で開催したが、協会主催の展覧会ばかりでなく、展示を希望する美術館への貸し出し、教育に役立てる学校への貸し出しを行った。また、画集の発行、展覧会での図録も度々発行されている。こうした様々な活用を通して国立公園絵画は、国立公園協会が制作の目的とした国立公園の紹介と啓発に多大な貢献を果たしてきたと評価される。その目的は、2014年4月以後「日光市立小杉放菴記念日光美術館」が継承している。

補 注

[1] 小杉放菴の著書、「草画随筆・満鮮と支那(1934年4月、交蘭社発行)」の「朝鮮の巻・金剛山抄日」は、昭和7年5月15日～23日の9日間、金剛山を巡った旅行記であり、5月19日のところに国立公園絵画のことが書かれている。

仮名使いを原文のまま引用するが、「…萬瀑洞に入つて更に普徳窟に登る、国立公園協會からの頼まれもの、二十五號の油繪の圖題をば、正陽寺にせうか、此處にせうか迷つたが、此處の方が勝手よしと定めた。」とある。

この朝鮮の巻の巻頭には、8頁に亘るスケッチ画の口絵があり、その中の1枚に国立公園絵画に描かれた風景と同じ絵が「普徳窟」と題して載っている。(国立国会図書館デジタルコレクション－草画随筆：満鮮と支那)

[2] 小杉放菴記念日光美術館の「小杉放菴の生涯をたどる年譜」によると、小杉國太郎は、雅号に1897年(明治30年)頃から「未醒」、1923年(大正12年)から「放庵」、1935年(昭和10年)頃から「放菴」を用いたと記載されている。本稿は「小杉放菴」を用い、必要に応じて本名の國太郎、雅号の「未醒」、「放庵」をカッコ書きで添えた。

[3] 東京都中野区の江古田地域の旧家で、江戸時代は名主を務めていた山崎家にあつて、大正から昭和にかけての当主山崎喜作氏は早稲田大学でテニス選手として活躍したが、ボプラ倶楽部の会員でもあり会長も務めた人である。山崎喜作氏は、小杉放菴と仲が良く、1938年(昭和13年)にペアー100歳以上で参加するテニス大会(大会名不明)百歳戦に小杉・山崎組で出場して優勝し、獲得した優勝盃(金色塗り木盃・直径10cm程度)を納める桐箱に小杉放菴が優勝記念の署名をしている。

また、早稲田大学庭球部が五十周年記念(昭和28年)で製作、配付した陶器の絵皿(直径24～25cm)の

デザインを、山崎喜作氏が小杉放菴に頼み、放菴がテニスをしている人をモチーフに描いた絵皿がある。

木盃と放菴署名の桐箱、絵皿の原画と絵皿が山崎喜作氏から「山崎記念中野区立歴史民俗資料館」に寄贈され保管されている。小杉放菴は毎日テニス選手権ベテランの部ダブルスでも3回優勝するなどテニスを愛好した。

- [4] 上原近代美術館は、公益財団法人上原美術館が運営する美術館で、上原昭二大正製薬(株)会長が長年収集した美術品の寄贈を基に2000年春に開館した。西洋近代絵画、日本近代洋画、日本画など多彩な美術作品を所蔵している。日本近代洋画の主な作品の1点として安井曾太郎「十和田湖」はHP上で画像が公開されている。
- [5] 内務省庁舎は、1923年(大正12年)9月1日に発生した関東大震災の火災で全焼した。以後内務省庁舎は仮建築であったが、1933年(昭和8年)9月に5年余をかけて鉄筋コンクリートの新庁舎が落成した。国立公園絵画の保存として、その新庁舎会議室に絵画を掲揚することが計画された。
- [6] 1949年(昭和24年)12月16日に財団法人国立公園協会が再発足した経緯は、1950年(昭和25年)4月発行の国立公園7号、29～32頁に詳しく掲載されている。
- [7] 内務省からは、1945年(昭和20年)5月25日の空襲で、内務省に保管されていた小杉放菴「日光」、牧野虎雄「春の富士」、南薫造「箱根蘆の湖」、川島理一郎「阿蘇」、山下新太郎「黒部溪谷鐘釣附近」、吉田博「大山」の6作品が焼失したという届け出があった。この他にも不明になった作品がある。なお、山下新太郎の作品は後日見つかっている。終戦前後は、絵画の保管状況が混乱していた。
- 内務省への照会は、国立公園協会が戦時中に財団法人国土健民会に改称しており、1947年(昭和22年)は国立公園協会に戻す準備を行っていた時期のため、内務省への照会文書は国土健民会名だった。
- [8] 戦時中に休刊した国立公園協会の機関誌「国立公園」は、戦後1948年(昭和23年)8月に復刊した。復刊1号から6号までは国立公園研究会の発行である。国立公園研究会は、1949年(昭和24年)12月に財団法人国立公園協会となり、1950年4月発行の7号から国立公園協会の発行になった。

引用・参考文献

- 1) 田中正史(1997)：小杉放菴－その生涯と画業、「開館記念・小杉放菴展」図録、財団法人小杉放菴記念日光美術館(改訂版が美術館のHPに掲載されている)
- 2) 林静一郎(1988)：国立公園絵画制作の経緯と保護管理の課題－釧路湿原作品の加入を機に－、国立公園463、14-18
- 3) 瀬田信哉(2006)：国立公園絵画を巡る物語(四)絵画収集の立役者、国立公園644、20-23
- 4) 国立公園協会(1931)：国立公園洋画展覧会開催準備、国立公園第3巻第10号、38
- 5) 国立公園協会(1931)：洋画家の出発、国立公園第3巻第11号、27
- 6) 国立公園協会(1932)：国立公園洋画展覧会、国立公園第4巻第11号、39
- 7) (公財)北区文化振興財団(－)：「田端文士芸術家村しおり」、田端文士・芸術家村年表、田端文士村記念会館
- 8) (公財)北区文化振興財団(－)：「田端文士村記念会館」パンフレット、田端文士芸術家村の説明と年表
- 9) 田中正史(1998)：国立公園の制定と日光、そして、小杉放菴と、「風景と自然・国立公園の絵画展」図録、16-17、財団法人小杉放菴記念日光美術館
- 10) 瀬田信哉(2006)：国立公園絵画を巡る物語(三)物語のある絵画展開催に向けて、国立公園643、18-21
- 11) 国立公園協会(1933)：国立公園洋画の保存計画、国立公園第5巻第1号、27
- 12) 国立公園協会(1933)：国立公園洋画に関する小委員会、国立公園第5巻第11号、32
- 13) 林静一郎(1953)：企画より完成まで、国立公園45・46号(国立公園絵画完成記念特集号)、31-32
- 14) 林静一郎(1953)：P.R.運動としての国立公園絵画－第二次制作進む、国立公園39、21-24
- 15) 林静一郎(1965)：新作を加えた国立公園絵画－制作の経緯と意義、国立公園191、13-14
- 16) 油井正昭(2009)：絵画に描かれた国立公園の顔、国立公園678、9-12
- 17) 油井正昭(2013)：国立公園絵画80作品の制作経緯とコレクションの意義、「美しき日本の風景・国立公園の絵画展」図録、6-11、財団法人小杉放菴記念日光美術館
- 18) 油井正昭(2013)：小杉放菴と巨匠たちが描いた国立公園絵画、小杉放菴記念日光美術館講演資料、1-14

